

金剛流《竹生島 女体》について

相山女学園大学 飯塚 恵理人

はじめに

《竹生島》は能としての上演が少ない。さらに金剛流の《竹生島》で小書「女体」が付いたものはさらに少ない。東海地域の記録で確認できた金剛流の《竹生島 女体》はこれまで昭和三十三年の会（後述）一回のみである。

小書「女体」について金剛流《竹生島》の謡本には、「常は龍神が主体であるが、この小書によると弁才天が主人公となる。従って前シテは女、前ツレは漁翁、後シテは弁才天、後ツレは龍神と主従が入れ替る。装束もそれぞれ変り、型も夥しく変化する。後シテの常の天女之舞は楽になり、キリ謡の箇所も主としてシテの弁才天が舞って納める。これは金剛家のツレ方長命家に伝わった小書と書かれている」（注一）と書かれている。

一 江戸時代の《竹生島》の上演と長命姓の役者の参加

小書「女体」を伝えた長命家はもともと長命座という一座を構えた山城猿楽の家であったが、文禄年間、秀吉が四座を保護した時期に解体し、長命次郎大夫などの有力な役者が金剛座に合流した。この時期の金剛座は広く優秀な役者を集めており、後に喜多流の祖となる喜多七大夫も金剛七大夫を名乗って金剛座に所属した。彼について表章は「文禄四年（10歳）から慶長七年（17歳）までに彼が舞ったことの判明する番数は（中略）計56番であるが（中略）（賀茂・竹生島・三輪）が3回」（注二）と、《竹生島》を三回舞ったことを著している。

この中の一つが「玉井家本 薪能番組」に載る「慶長三年二月十日 興福寺新猿楽南大門能 五日目 竹生島 シテ 金剛七大夫

ワキ 高安」（注三）であり、現在知られる金剛流による最古の《竹生島》の上演記録の一つである。慶長三（一五九八）年にはすでに長命座の役者が金剛座に合流していたが、ここにはシテツレ等が書かれていないので長命家の役者がこの催しに参加していたかは明らかでない。その後、長命家は幕末まで金剛座内に処を占めたが、「国文学研究資料館データベース」（前掲の注三）上には長命家がシテカツレを勤めた《竹生島》の上演と「女体」の小書付きの《竹生島》の上演は載っていないかった。このため、《竹生島 女体》がいつから金剛流で演じられたかを明確にすることは出来なかった。今後、彼らを用いた藩などの史料を精査しこの点を明らかにしたい。

二 東海地域における《竹生島 女体》の上演

「東海地域能楽データベース」は、大倉流大鼓方の寛鉦一が収集した明治維新から昭和末年までの五千枚を越える東海地域の能楽番組を基に作成されたデータベースである。このデータベースには一件だけ金剛流による《竹生島 女体》の番組があった。これを引用すると「第28回名匠鑑賞能 五流道成寺第4回 昭和32年1月27日 場所…熱田神宮能楽殿 主催者…名古屋能楽鑑賞会・田鍋惣太郎 後援…名古屋能楽会・名古屋金剛会・中部日本新聞社・朝日新聞社・NHK・CBC 入場料…有料 能《竹生島 女体》シテ 豊嶋弥左衛門、シテツレ 種田治郎、ワキ 高安滋郎、笛 藤田六郎兵衛、小鼓 田鍋惣一

郎、大鼓 西尾孫太郎、太鼓 鬼頭八郎、間 野村又三郎、後見 今井幾三郎・豊嶋訓三・竹市秀雄 地謡 中内邦雄・安部長太郎・重本昌三・松野繁男・広田泰三・広田隆一・種田道雄・種田治郎(筆者注)一部フォームを変えて引用したとなる。この催しは「第28回名匠鑑賞能 五流道成寺」とあるように小鼓方の田鍋惣太郎がシテ方五流の名人を相手に《道成寺》を勤めるところが眼目で、この番組でも田鍋惣太郎は金剛巖の《道成寺》古式の小鼓を勤めている。沼艸雨が番組に「今回の『竹生島』の女体は珍しい。金剛流のツレの家長命家に出来たもので、常のツレ弁才才がシテになり、尉がツレになるが位はやはり両シテということになる。(中略)中人はシテ(女)が作物に入ると、ツレ(尉)は幕に入り、後は増の面に天冠に金ノ鳥居の立物に舞衣、緋大口で楽を舞う。ツレは竜神で常に変らぬ活躍をするので種田次郎氏がこれにあつている訳である。」(注四)との文章を載せている。廣田幸稔師によると、やはり現行の金剛流《竹生島 女体》でもツレの面は小面から増女に、長絹は舞衣に作るそうである。

三 明治以降における喜多流の《竹生島 女体》の上演と能評

《竹生島 女体》は喜多流にもある。ただし金剛流では前シテ・後シテが共に天女(弁才才)であるのに対して、喜多流の場合、前シテは小書きなしの場合と同じく漁翁、後シテが天女になるという違いがある。喜多流の《竹生島 女体》についてその型をよく伝えており、金剛流との比較を考える上でよい資料となる『坂元雪鳥能評全集 上巻』大正五年の九月二十九日の能楽会式能の記事(注五)を以下に引用する。「初番は『竹生島』の女体、シテ喜多六平太氏、ワキ松本謙三氏。此小書では天女の方が後シテであるから、前後入違ひになり、中入前の文句が甚だ納まりにくい。『御殿に入らせ給

ひ』といふツレ女が幕へ入り『波に入らせ給ひ』といふ翁が宮へ中入するのだから、何うも無理になる。(中略)間は老翁(高井氏)で常と替つて居た。(中略)「其時虚空に」の返しに宮を出て楽になつた。謡の静まること言ふ迄もない。楽は頗る立派であつた。(後略)」とある。前シテと前ツレの退場には難があるが、後シテが「楽」を舞うのが見所だったということだろう。

また村上湛はインターネット上に、喜多流の《竹生島 女体》を觀世流に移植した《竹生島 女体》(シテ觀世清和 平成二十六年一月五日)について、「能(竹生島 女体)の異形性」という能評(注六)を書いている。それによると喜多流の《竹生島 女体》には詞章と所作に無理があり「伊井直弼が竹生島尊さのあまり無理を承知で辯才才をツレからシテに格上げしたいがための創作であろう」が、金剛流の《竹生島 女体》にはそのような「無理」がなく「女体」ならばこちらの型を活かしたいと私などは思う。」と述べ、坂元雪鳥と重なる指摘をしている。

まとめ

金剛流の《竹生島 女体》は「或は天女の形を現じ。有縁の衆生の所願を叶え。又は下界の龍神となつて。国土を守る誓ひを顕し」とあるとおり、神が衆生の願いによつて弁才才にも龍神にも変身するという《竹生島》の筋・内容に合致した演出であり、金剛流のみに伝わる優れた演出である。

本会では廣田師が必ずや上品で美しい天女姿を見せてくださるであろうことを期待して楽しみにしている。

注一 「金剛流謡曲本 竹生島」
訂正著者 金剛巖 発行兼印刷者 檜常正 繪書店 発行年不記 二丁の表
注二 「喜多流の成立と展開」 表章 平凡社 平成六年八月発行 二二四頁
注三 「国文学研究資料館連歌・演能・雅楽データベース」
(<http://base1.nijl.ac.jp/geinou/>)による《竹生島》の検索結果より部分引用
注四 「(第二十八回)名匠鑑賞能 五流道成寺(第四回)番組チラシ裏面
坂元雪鳥能評全集 上巻」 坂元雪鳥 豊島書房
昭和四十七年五月発行 二五五―二五六頁 記事日付は十月三日
注五 村上湛 インターネットブログ「好雪録」
(<http://www.murakamitatau.com/blog/2014/01/201415.html>)より部分引用

補記 原稿の依頼と資料等に御便宜頂きました廣田鑑賞会と廣田幸稔先生に心より感謝致します。本稿は平成二十六年度科学研究費助成事業研究Ｃ「東海地域近世・近代能楽資料の収集・整理とデータベース化」(研究代表者:飯塚恵理人 課題番号:23520256)による成果の一部となります。